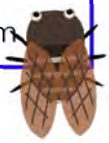
編集後記　サウンド・オブ・サイレンス

アヴニール労務事務所 所長 柿野元博
http://www.avenir-sr.jp
E-Mail avenir4you@gmail.com



「閑さ（しずかさ）や岩にしみ入る蝉の声」とは、「奥の細道」の中で出羽の国（山形）を訪れた松尾芭蕉が詠んだ俳句です。
暑い夏の盛りに成虫としてのはかない命を精一杯謳歌するような、蝉の声は時に心に染みます。

うちの愚息が小学校４年生の夏、所属していた少年野球チームが４年生以下でチームを編成し、公式戦である夏の豊中大会（5 年生以下の部）に初めて臨みました。(^o^)

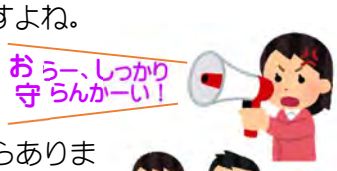
われらがチームは、４年生が３人だけで他に３年生と２年生を合わせたチーム。
よりによって１回戦の相手が悪かった。優勝候補筆頭の強豪チーム。もちろん全員５年生です。
悪い予感が当たってしまい、１回表の相手チームの攻撃が終わりません。
最初のうちは、「大丈夫大丈夫！まだ逆転できるぞー！」とか、「しっかり守れー」とコーチや父兄から声が飛んでいましたが、なんせ守れない。３点が５点になり、１０点、２０点・・・。(>_<)
だんだん相手チームもなんか申し訳ないことをしているみたいな感じになり、ただただ蝉の声がグラウンドに染みていく、野球には似合わない活気のない静かな試合となりました。
結局は、２回裏ワンアウト迄で時間切れで試合終了。まるでドクターストップでした。
最終的には３０何点取られて、当時の豊中大会の大勝（大敗）記録となりました。

それなりに収穫のあった経験でしたが、一番の収穫は日頃控え目で可愛い感じのお母さんが実は熱い体育会系だったということがわかったりして(^o^;、コーチや父兄の相互理解が深まり結束が固まったことでした。

職場においても同じ目的を持つ集団である以上、言いたいことが言い合える関係であってほしいもの。
でも、あえて沈黙すべき時もあります。ちなみに沈黙はコーチングの「傾聴」のスキルのひとつ。
会議や話し合いの場では「相手が話し終わるまでしっかり待つ」ということです。
具体的には、相手が話し終わってから 1～2 秒くらいは間をあけて自分が話し始めるといいとされます。
終わったと思っても相手がまた話し始めるかもしれないので、間をおいて遮らないようにしてくださいね。

静かさが染み入る音はセミの声だけではありません。
例えば８月１５日の終戦の日の正午に、高校野球の甲子園球場で鳴り響くサイレンがそうです。
選手や観客が揃って黙とうを捧げます。テレビを通じても独特な静寂と緊張が伝わってきます。
戦争になったらと思うと、血を見ただけで気を失うようなヘタレな僕は戦士にはなれません。
子どもたちや孫たちを守りたいけど、ヘタレな僕なんかがどうやったら下の世代を守れるのか。
それはきっと、責任ある僕たち大人たちが、戦争をしない社会にすることしかないように思います。
青い空と入道雲の下、甲子園球場に鳴り響くサイレンは、そのことを思い起こさせてくれる大切な静寂の音です。

世界が第三次世界大戦＝核戦争にもっとも接近したとされる「キューバ危機」を回避したのは、史上最年少で選出された第 35 代アメリカ大統領 J・F・ケネディの功績です。
１９６３年そのケネディ大統領が凶弾に倒れた事件は世界に衝撃を与えました。
ケネディをヒーローのように崇めていた 22 歳のポール・サイモンもショックを受けたといいます。
そんな不安感が高まる世間の喧騒の中、書いた曲があの『サウンド・オブ・サイレンス』です。
映画「卒業」に採用されたこの曲もまた、心に染みていくような文字通り「静寂の音」ですよね。
その後、サイモン＆ガーファンクルは世界のトップ・アーティストに登りつめました。



一方、愚息のチームのその後ですが、強豪チームに成長・・なーんてことは、残念ながらありませんでした。でもそれなりに声をかけあう、そこそこのチームにはなったと思いますよ。σ(^_^;)
記録にも記憶にも残っている、今となっては楽しい夏の思い出です。^_^-☆